

ザ・デイ

The Day
NHK取材班

7

若者はどう変わる



その日

昭和55年-日本

冬の蝶翔んだ

ザ・テイ

7

若者はどう変わる

●発行

昭和六十二年五月二十日 第二刷発行

●定価

二二〇〇円

●著者

NHK取材班・岩間芳樹

©1986 Ryoju Katsube, Yoshiki Iwama. Printed in Japan.

●発行者

藤根井和夫

●発行所

日本放送出版協会

郵便番号一五〇 東京都渋谷区宇田川町四二一

電話(〇三)四六四・七三二 振替・東京一四九七〇一

●印刷所

株式会社太平印刷社・大熊整美堂

●製本所

株式会社石津製本所

●ブックデザイン

勝井三雄・大六野雄二

検印省略 落丁・乱丁はお取り替えいたします

ISBN4-14-008437-5 C0330 ¥1200E

はじめにさまざまな若者群像のはざままで

I

● 第一章

若者たちがわからない

——彼らはいま、なにを求めているのか

1 若者風俗最前線をゆく

10

2 若者の心をキャッチする——大人たちの思惑

33

3 リッチ・チャイルドの素顔

49

4 モラトリアム志向と三人の若者たち

65

●第二章

いま気掛りな、若者たちの病理

——彼らはなにを生き急ぐのか

- 1 広がる心の病のすそ野

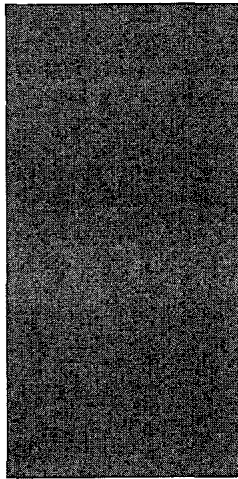
124

- 2 早熟化する若者たち

131

- 3 キャンパスにはびこる無気力——幼児化する若者たち

146



●第三章

若者たちの性

——タブーに挑む若者たち

- 1 性教育の現場から

162

- 2 十代の母たち

171

- 3 在学中の出産、そして卒業へ

186

- 4 女性の性、これからどうなる

200

● 第四章

若者よ、明日をつかめ

限りなき未来へ続く道

1

遊民化する若者たちの明日

210

2

豊かな心をつくりだすために

ある「とも村」の実践から

221

●
おわりに 若者は大人と時代を映す鏡

237

●
ドラマシナリオ [冬の蝶翔んだ]

245

あとがき

281

はじめにさまざまな若者群像のはざままで

ある少女との出会い

ある少女の話からはじめたい。

私がその少女とはじめて会ったとき、彼女は十六歳だった。三年前、昭和五十八年の春のことである。彼女は埼玉県内の公立高校を一年で退学し、あるスナックにアルバイトとして勤めていた。むろん十六歳では、そのような店では働けない。店では十八歳でとおしていた。

仄暗い店のあかりのなかでも少女の目は不思議にキラキラと光っていた。

カウンター越しに少女はしゃべりはじめた。十六歳にしてはやや大人っぽい、ハスキーな声だった。

「高校に入ってからすぐに、タバコを持っているのを先生に見つかっちゃったの。途端に休学処分。中学のときからツツパリで有名だったから、目をつけられていたのね。みじめで落ちこんじゃったけど、もともと先生や学校好きじゃなかったからね。日記と反省文を書いて学校に出すことが、学校に戻る条件だったけど、フン、書いてやるもんかと思ったわ。パパとママからも、ずいぶん書くように言われた

けど、ガンとして書かなかった――。結局、半年後にタイガク。自主退学というヤツね。教頭も担任も厄介払いをしたという感じでホッとした顔してたわ。それからいろんなワルイことやっちゃった……」
深刻な話なのに、少女の話しぶりには奇妙な透明感があった。くったくのない表情も心にのこった。

少女の変身の裏に

その少女と再開したのは、三年後の六十一年の春、渋谷の街頭だった。長かった髪をショートカットにし、白いこざっぱりしたワンピース姿の彼女に、最初はまったく気がつかなかった。声をかけてきた彼女の笑顔と目がふいに記憶をよみがえらせてくれた。化粧も薄く、まるでごく普通の女子大生のような彼女の変貌ぶりに私は驚くだけだった。

喫茶店での彼女の話――

「いろんなことがあったけど、いまはこの渋谷のブティックでアルバイトしてます。男とも別れたし、アパートでひとり暮らしだけどマジな生活。母とも仲直りして週に一、二度は両親の家へ帰っておしゃべりするの」

―― いったいなにがきつかけだったの。

「よくわかんないけど、いろいろ遊んだりしていても楽しくなくなってきたのね。それにどんどん海の暗い底に沈んでいくような恐怖感が強かった。もうじきハタチ、卒業しなきゃ、という気分にもなっ

たのね。そしてある日、美容院に行ったら美容師さんに『あなたの髪、ずいぶんいたんでますね』って言われちゃった。シヨックだった。それで髪の毛思い切ってショートにしてもらったの。鏡に映った自分を見てなにか別の人間になったような気がしたわ。それ以来ね」

彼女は照れながら、その短くなった髪をかきあげた。

「いまはなにかこう、とつても勉強したい気分。漢字をあまり知らないし、むずかしい言葉もわからないし。この間、本屋さんで中学生向けの国語の問題集を買っちゃった。おかしいでしょ。あまり進んでないけど、夜少しずつやってるの。料理も勉強したくて、これは母にときどき教わってる。でも、学校へ行くのはイヤ、絶対にイヤね」

彼女とコーヒーで乾杯をして別れ、渋谷の公園通りの雑踏のなかを歩きながら、私はもうひとつの光景を思い出していた。

さまよひ歩く学生たち

それは、東京大学の安田講堂の一階にある「学生相談室」の光景だった。私は二年前、昭和五十九年夏に放送したNHK特集「日本の条件——教育・大学と大学生」の取材のため、その年の五月、この学生相談室を訪れた。学生たちの間に「キャンパス症候群」と呼ばれる神経症状が広がっているその様子を実際に見てみたいというのが目的だった。

ちょうど五月祭の最中で、安田講堂前のキャンパスは、新緑と音楽と学生たちであふれかえっていたが、その小部屋のなかには静かでひんやりとしていた。

その日の午後も、三人の学生が訪れていた。三人とも見た目には、まったく一般の学生と変わらない。真面目そうで物静かな学生たちである。だが、さまざまな悩みを抱えていた。

「人と話すのが怖くてコンパにも出られない」

「木の芽のにおいや他人のにおいが気になってたまらない」

「試験の前になると不安になって、下宿から母親へ電話をして助けを求める」などなど。

そして安田講堂下の穴ぐらのような相談室に毎日のように来て、女性カウンセラーに話を聞いてもらえば心が休まるという。

相談室に来る学生たちは、隣り合わせに座っても、お互いにほとんど口をきかない。小さなテーブルをはさんでソファの向こう側にいるカウンセラーにだけ話しかける。ほかの学生が話をしている間、あとの学生は本やマンガを読んでいるか、ラジカセから流れる音楽をイヤホンで聞いているかしている。またある女子学生はタロットカードというトランプに似たカードで一心に占いをしている。そしてひとり言のように、占いの結果をカウンセラーに話しかける。

カウンセラーと学生たちとのなんとも奇妙な放射状の関係だ。この相談室を管轄している東大保健センターの話によれば、本郷と駒場にある保健センターを訪れる東大生は、一年にのべ四〇〇〇人ちかくにおよぶという。一〇年前の二倍以上の数だ。

私たちの取材にカウンセラーは話してくれた。

「いまの学生の多くは、社会的な体験があまりに少ないんですね。こどもの頃から勉強、勉強で、学校と塾と家の三角形のなかでしか世界がない。だから幼稚化して、なかなか自立できない学生が目立つようになってきましたね」

「それに、かつては『五月病』という言葉があつたように、大学に入学したばかりの学生が『なにをしたらいのかわからない』といって憂うつ症にかかるケースが多かつたのに、最近是一年目より専門学科を決める二年目とか、卒業を控えた四年目や大学院生にも症状が広がってきたのが特徴ですね。なぜっていうと就職は決まったものの、社会に出ていくのが不安で仕方がないというんです。さらに最近のケースでは、就職した社会人が会社での勤めの不安を訴えてその相談室に舞い戻ってくる人もいますよ」

それぞれの若者像を結ぶ糸

高校を中退し、ものすごい体験を経たあとつきものが落ちたように変身した少女と『東大一直線』で走ってきて大学に入ったら目標を失い、社会に出るのが怖いという学生――。

この二つの若者像を、私たちはどう結びつけて考えたらよいのだろうか。若者たちのさまざまな行動や考え方を前になかば呆然自失、とまどうばかりだが、それでもメビウスの帯のように、裏も表もなく

どこかで同じ平面でつながっているにちがいない。

私たちがNHK特集「その日——1995年日本・冬の蝶翔んだ」若者たちはどう変わる」(昭和六十年一月放送)の取材に取り組みはじめたとき最初に努めたのは、そうしたいまの若者たちの行動や考え方の間の「共通項」を探ろうということだった。取材スタッフは、あちこちに散って若者たちの話や学者、専門家の話を集めだした。しかし集めれば集めるほど若者像の焦点は明確に結びきれない。専門家たちも「結局はわからんのですよ」とぼやく。いまの社会の多様化、価値観の多様化を反映して、若者たちの姿もそれだけバラエティに富んでいるということなのだろうか。

私たちは議論を重ねたすえ、ともかくこうした多様な若者たちの姿を群像として素直に追ってみよう。そのうえで近未来を感じさせる若者を何人かクローズアップして、その生き方を伝えてみよう。若者たちはこうだ、こうあるべきだという断定は避けよう。また若者たちを冷たくとらえることはしない。暖かい目でみつめよう——これが私たちが具体的な取材にあたつての基本的な編集方針であった。

事前取材の結果、私たちは三人の若者にスポットをあてることを決めた。

鮫肌文殊さまはもんじゆというペンネームで漫画やギャグ、コントの世界で活躍中の大阪の学生、井上英樹君・二十歳。「真面目はキラい。楽にして好きなことだけして生きたい」とマジメに話す面白人間だ。

十代が十代のためにつくった雑誌「ヒストリーズラン」の編集長、高野大君だい・十八歳。「いまの十代には、なにかを燃焼させて闘うリングがない。大人の作ったリングから飛び出して自分たちのリングを作ろう」と懸命に走りつづけている。

関東の大学の学園祭をとりしきるイベント人間、西川隆尋君・二十五歳。坂本龍馬を尊敬し「社会の大きな渦に巻きこまれて生きていくより、自分で渦を作って周囲を巻きこんでいく、そんな生き方がしたい」と胸を張る。

この三人の生きざまについては第一章で詳しく紹介しているが、モノの満ちあふれた豊かな管理社会のなか、「カプセル人間」と評されがちな現代の若者のイメージから見れば、いずれも異色といえる若者だ。もつと平凡な普通の若者をとりあげる方法もあったが、私たちはあえて、その「異色」のなかから若者の一〇年後を見てみたいと思った。

若者像の断面から見えるもの

「異星人」とか「エイリアン」とかいわれ、とかく批判的に見られているいまの若者たち。そしてさまざまな「若者論」がいま花ざかりである。私たちが今回とりあげた若者考も、複雑な若者像のひとつの断面にすぎない。しかし一人ひとりの若者と行動をとみにし、その心の世界をのぞいてみると、若者は若者なりにいまの社会をみつめ、懸命に生き方を探ろうとしているのがはっきりとわかる。ただ、その表現の仕方、生き方のスタイルが大人の目からみると変わってきたのにすぎないのではないか。私たちスタッフの取材リポートである本書が、いまの若者たち、これからの若者たちを見つめ、考え、そしてつぎあうための一助となれば幸いである。

この原稿を書いている今年（昭和六十一年）の四月、アイドル歌手だった岡田有希子さんがビルの屋上から飛び降り自殺し、そのあとを追うように二〇日あまりの間に四〇人をこえる十代の少年や少女が自殺した。その悲しいニュースが相つぐなか、私のもとに冒頭で書いた少女から一通の葉書が届いた。その後も元気でやっていると意外にしっかりと字で近況を伝えたあと、こう結んであった。

「私にもいい彼ができました。同じ高校中退組だけど、とってもいい人です。建築の仕事をしています。いい奥さんになって、いい子を生みたいです」

第一章

若者たちがわからない

彼らはいま、なにを求めているのか

1 若者風俗最前線をゆく

様変わりする原宿・

歩行者天国の若者たち

東京・原宿の公園通りは、若者の流行を知るうえで興味ぶかい。たけのこ族に始まり、ロックンローラー、ブレイクダンスと移り変わり、いまは、若者の趣味趣向の多様化を反映して、この三つのグループに加えて、パントマイム、ローラースケート、演劇、漫才とさまざまなパフォーマンスが路上をにぎわしている。

昭和六十年秋、こうしたグループが集まって、「第一回原宿アツピール」が開かれた。好き勝手にやっていたグループどうしが、一つにまとまったわけである。この「まとまった」ということに、原宿の若者たちの様変わりが象徴的にあらわれている気がする。一言で言ってしまうと、すべてがまとも、あるいは普通になった、という印象である。

通称・原宿五郎、ロックンローラーの総リーダーである。リーゼントスタイルの髪型にサングラス、黒の皮ジャンの胸元から真っ赤なTシャツがのぞく。「原宿アツピール」の主催者の一人である。その彼が、この日、引退を表明した。

外見はいかにも突っ張り風だが、言葉づかいは丁寧で、礼儀正しい。参加している若者たちを取材したいと申し込むと、気軽にOKした。

「だれに聞いても結構ですよ。みんな親に断って、ここに来ていますから」これには驚いた。四年前



第1回原宿アッピールに参加した若者たち

にもここでインタビューをしたことがあるが、親や学校に内緒の子が多く、マスコミの取材には神経質であった。学校や家庭では満たしきれないなかがあつて、それをこの路上で爆発させる、そんな雰囲気があつて仲間以外の者は無視されるか、うさんくさい目で見られたものである。

こうした変化は、彼らの直接の声にもあらわれている。たとえば、自分の将来について聞くと、女の子たちは「かわいいお嫁さん」が大半、「エレクトーンの先生」や「保育園の保母さん」という答えもあった。皮ジャンやサングラスで決めているが、話しだすとあどけない。

男の子たちにしても「家が散髪屋だから、その主人になつているんじゃないの」とか、学生ならば一様に「サラリーマン」。普通の中学生、高校生と変わるところがない。唯一の例外は、自動車の修理工をしているロックンローラーの青年。会社でもやもやしているのをここで発散させるのがいまの楽しみという彼は「とにかく、大きくなりたいね」と挑発的な目をした。



原宿五郎

てどこのバカが言ったのでしょうか」とある。

なにか普通になっている。

いまの原宿には、たけのこ族やローラー族の「族」という言葉がもつ反抗のイメージがない。不良や非行とも無縁だ。

もちろん、この様変わりを悪いとは言えない。むしろ歩行者天国の終わる二〇分前には道路の掃除を

もう一つ特徴的なことは、好んで「卒業」という言葉を使うことだ。彼らのほとんどすべてが二十歳ぐらいをめどに、この原宿から足を洗うと決めているようだ。「ぼくも、もう卒業ですからね。ラストスパートって感じですよ」と、十九歳のたけのこ族の副リーダー^{サブ}。

この日、引退した原宿五郎にしても二十一歳。

「子どもが生まれたらリーゼントにさせて、ここで父サンは踊ってたんだぜって言ってみたいですね。それまで後輩たちに頑張って欲しいです」と、しんみり。

なにかすべてがまともである。

「原宿アツピール」の宣言文にも「不良少女の集まりだなんてどこのバカが言ったのでしょうか。暴走族の集まりだなん